

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）  
分担研究報告書

進行性骨化性線維異形成症 (FOP) における顎顔面形態・咬合に関する研究

研究分担者 須佐美 隆史

東京大学医学部附属病院 顎口腔外科・歯科矯正歯科 准教授

**研究要旨** 進行性骨化性線維異形成症 (FOP) 患者において開口障害が成長発育期に生じると、顎顔面骨格の成長や咬合に異常をきたす可能性がある。本研究では、FOP 患者の顎顔面骨格形態、咬合を調べた。その結果、顎関節・筋突起の形態異常、小下顎、上顎前突がみられ、FOP の二次的症候である可能性を示した。

**A. 研究目的**

進行性骨化性線維異形成症 (FOP) 患者において開口障害を成長発育期に生じると、顎顔面骨格の成長や咬合に異常をきたす可能性がある。本研究は、FOP 患者の顎顔面骨格形態、咬合の特徴を明らかにし、成長に伴う変化を調べることを目的とした。

**B. 研究方法**

開口障害を示す男性 FOP 患者について、8 歳から 21 歳までの成長に伴う変化を調べた。資料は診療上採取した、顔面・口腔内写真、歯列模型、頭部 X 線規格写真とした。研究にあたっては、患者および家族の全面的な同意と協力を得た。

**C. 研究結果**

顔貌は下顎の後退を示し、顔面骨格は II 級 (ANB 10.1°) で上顎の前方位と小下顎を示した。咬合は著しい上顎前突 (overjet 9.5mm、overbite 5 mm、Angle Class II) であった。下顎筋突起部の異所性骨化がみられ開口障害の原因となっており、下顎頭の平坦化がみられた。こうした特徴は成長に伴い大きく変化することはなかった。また、大臼歯の埋伏・萌出異常を示した。

**D. 考察**

患者は著しい上顎前突を示したが、大きい overjet が食物摂取に有利に働いていたため歯科矯正治療は行わなかった。下顎頭の変性に伴う小下顎が上顎前突の一因と考えられ、成長に伴い生じた大臼歯の埋伏・萌出異常も小下顎による萌出余地不足により引き起こされたことが考えられた。

**E. 結論**

顎関節・筋突起の形態異常、小下顎、上顎前突がみられ、FOP の二次的症候である可能性を示した。

**F. 健康危険情報**

特になし。

**G. 研究発表**

1. 論文発表

英文論文作成中

2. 学会発表

須佐美隆史、他：進行性骨化性線維異形成症 (FOP) の 1 症例：8 歳から 21 歳までの経過. 第 69 回日本矯正歯科学会大会. 2010 年 9 月, 横浜 (第 69 回日本矯正歯科学会大会抄録集, 291, 2010.)